

OPINION オピニオン・スライス SLICE

— 大阪市内にお住まいですが

もともとは大阪というものに何もこだわらないと思ってたんですけども、長年作品をつくってきましたら、やっぱり自分の中には大阪の血が流れてるなというのがこの年になって分か

絵本作家

長谷川義史さん

って。大阪に長年住まわせてもうたから自分の今の作品ができたんやなというのがあって、大阪に根をおろしてやろうとここ数年考えていまして、それで偶然ここが見つかったんです。

— 絵本作家の前はイラストレーターのお仕事だったそうですが

最初やり始めたころは、ただ単に絵が描けたら何でもいいやと思って

たので、とりあえずはイラストのお仕事をしたかったですし、絵本というのはやりたかったですけど、もうちょっとまだ遠い世界で。

好きなことですから、金銭的には全然恵まれてなかったですけども、お金がないからという苦しさというのは全然大したことなく、やりたけれども仕事来ない、絵を描きた

お金がない
という苦しさは
大したことではない……



YOSHIYUKI
HASEGAWA

いけれども依頼が来ないというほうがものすごい苦痛、苦労でしたね。

—— 絵本の世界は商業的には厳しいのではという印象ですが

絵本のほうが格好いいなと思ったんです。というのは、広告の仕事というのは、自分が思ったものを表現するんじゃなくて、この商品はいいんだよというのを一般の人に分かりさせるために表現するでしょう。別に僕がこの商品を嫌いでも関係ないわけじゃないですか。よっぽど嫌なものはありませんけど、そこには自分のポリシーというかそういうものが入ってない。それをうまく表現してあげるのがプロのイラストレーションの仕事ですけれども、それよりは自分の中のものを表現するというジャンルの絵本のほうが僕は格好よく感じました。クライアントの思いを伝えるのではなくて、自分の思いを伝えるから、そういう意味で絵本に憧れがありました。だから、金銭的にそのほうがもうかるのかもわからないというのは何にも考えてなくて、ただ自分の絵本というのをつくりたいと思ってやり始めました。

—— イラストのときも、画風は今と同じで

いや、違いましたね。クライアントの要望もありますし、自分のスタイル自体が何や分かへんかったですから、自分がこんな絵を描くんやというのがまだつかめていないときなんで、自分で試行錯誤してました。

イラストレーターとしてやっているかと思ってたときに、イラストレーターというのは山ほどいるわけです。その中で自分のカラー、長谷川はこれを描くんだというのをあえてぐっと絞って出していかないといけないから、自分のスタイル、キャラクターというのを無理につく

▶長谷川さんの作品



(佼成出版社 発行)

ろうとしてたんです。それは自分の中から自然に出てきているものではないので、無理矢理つくっているので破綻していくんですね。僕、子どもころはもともと画面からはみ出るように絵を描けてたんです。それをだんだん自分で無理矢理型にはめていってたからそれができなくなってたんです。それが劇団南河内万歳一座のチラシの仕事をやらせてもらうのがきっかけで、もともと自分が描いていた絵にまた帰ることができたんです。

—— そんな絵本の世界で最近特に活躍ですが、飛躍のきっかけは

徐々にいろんな絵本を描くようになって、絵本の仕事が主体になって、ただ絵本を描いて発表しているだけじゃなくて、「絵本ライブ」と僕は言ってますけど、読者の人の前で自分の絵本を読む活動とかをやって、そういう自分のやってきた活動が徐々に認めれていったんじゃないですかね。

—— 弁護士へ一言

私なんか偉そうなことは何も分かへんし、難しいことは全然分かへんねんけど、法律って誰かが決めた——誰が決めるのか知らないんですけど、難しいことが書いてあって、それも解釈のしようというのがあるじゃないですか。その解釈のしようがあるから、裁判とかやって最後に裁判長が決めるんやろうけど、法律というのがあるけど、それをど



(理論社 発行)

ういうふうに理解してやるのかは弁護士の器量じゃないですか。そこに人間的な気持ち、思いやりというものがないと、ただ裁判に勝つために法律というものを自分なりに解釈してやってたら、僕、結局そういうのはあかんようになると思うんです、そんな人は。目先の計算を優先させてやっていくと、どんな世界でもあかんと思うんです。そやから、ほんまに自分の正しい信念というのを持って、相手を思いやって相手が喜ぶようなことをしてあげて、そうしていくことが相手のためにもなるし、世の中のためにもなるし、自分自身のためにもなると思うんです。

もう一つ、ありがたいことにそういう機会がないんですけど、弁護士の人に仕事を頼むというのは、どのように探してどのように仕事を頼むんやろうというのがすごい興味があります。「この人」というのはどないして選ぶことができるんですか。顔写真と経歴と今までやってきた事件とか、そんなんが出るファイルみたいなものはないんですか。そんな無茶なことはされないやろうというのは分かるんですけど、金銭的なことよりもどなたが信頼できるかというのが分からないじゃないですか。それが不安でもあるし。どないすんのやろうというのがありますよね。

(Interviewer: 桂 充弘 / Photo: 武田真実)